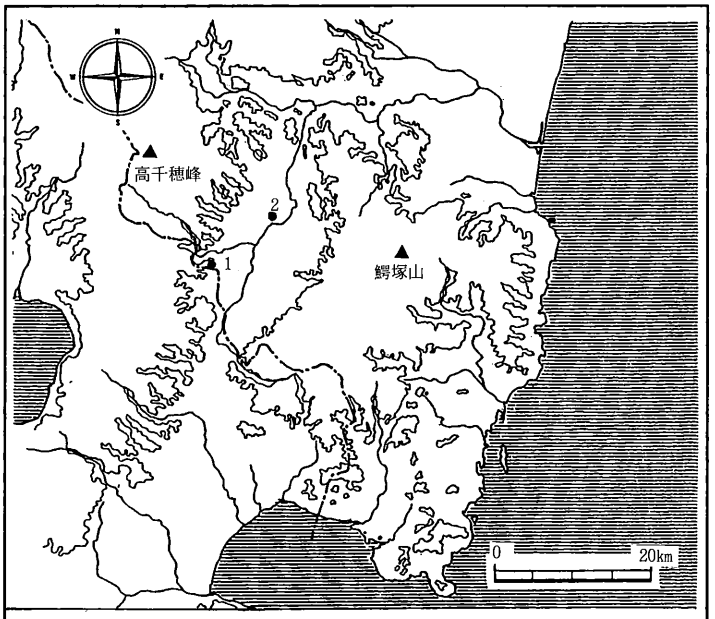
都城市文化財調査報告書第９集

母智丘原第１遺跡

母智丘・関之尾公園整備事業に伴う発掘調査

県指定 志和池１号墳

周溝確認のための試掘調査



１．母智丘原第１遺跡　２．志和池１号墳

1989

都城市教育委員会

序

この報告書は都城市教育委員会が昭和62～63年度に実施した２つの遺跡の発掘調査記録であります。

さて、近年の全国的な発掘調査件数の増加は目を見はるものがありますが、都城市もその例にもれず、数々の開発行為に伴う確認や記録保存のための発掘調査件数が激増しています。

本書に掲載した２遺跡のうち、公園整備事業にともなって発掘調査の行われた母智丘原第１遺跡では、弥生時代、平安時代の遺物が出土しており、特に平安時代のものについては古代の都城盆地の様子を知る上で重要であります。また、県指定の志和池１号墳の周溝確認調査では今まで不明瞭であった志和池古墳群の一端を垣間見るための貴重な資料が得られました。

本書が生きた歴史教材として生かされるとともに、今後の学術研究に少しでも寄与できることを願っています。

発刊にあたり、発掘調査に参加された皆様、また、報告書作成に御指導・御協力いただいた関係各位に対し、心から感謝の意を表します。

平成元年３月

都城市教育委員会
教育長　久味木福市

例　　言

1．本書は、都城市教育委員会が実施した埋蔵文化財発掘調査報告書である。

2．掲載した遺跡は、都城市横市(よこいち)町所在の母智丘原(もちおばる)第１遺跡と都城市下水流(しもずる)町所在の県指定志和池(しわち)１号墳の２遺跡である。

3．母智丘原第１遺跡の調査は母智丘・関之尾公園整備事業の新展望台設置にともなう緊急発掘調査で、志和池１号墳は墳丘周囲の周溝の確認調査である。

4．本書の編集は都城市教育委員会社会教育課が行った。

総　目　次

1．母智丘原第１遺跡……1

2．県指定　志和池１号墳……25

母智丘原第１遺跡

例　　言

1．本書は母智丘（もちお）・関之尾（せきのお）公園整備事業にともない、都城市教育委員会が実施した都城市横市（よこいち）町6691番地所在、母智丘原（もちおばる）第１遺跡の発掘調査報告書である。

2．発掘調査の実施は都城市教育委員会社会教育課があたり、同課文化係主事補の桒畑光博が調査を担当した。

3．出土遺物の整理作業（水洗・復元・注記）については都城市立図書館内の埋蔵文化財仮収蔵室にて行った。

4．本書掲載の遺構・遺物の実測図の作成とトレース及び写真撮影は全て調査担当者があたった。

5．本書に使用した基準方位は磁北であり、レベルは海抜高である。

6．本書の執筆・編集は桒畑が行った。執筆に際し下記の方々の助言・御教示を受けた。

上村俊雄（鹿児島大学法文学部教授）
本田道輝（鹿児島大学法文学部助手）
重永卓爾（都城市文化財専門員）

7．発掘調査におけるすべての記録と出土遺物は都城市立図書館内の埋蔵文化財仮収蔵室にて保管している。

本文目次

Ⅰ　はじめに
1．調査に至る経緯…… 7
2．調査の組織
3．遺跡の立地と環境…… 8
Ⅱ　発掘調査報告
1．調査の方法と概要…… 11
2．層序
3．遺構…… 12
4．遺物…… 15
Ⅲ　まとめ ……19

挿図目次

第１図　母智丘原第１遺跡と周辺の遺跡（1/50,000）…… 9
第２図　遺跡周辺地形図（1/2,000）…… 10
第３図　土層断面図（1/60）…… 12
第４図　土壙実測図（1/40）…… 12
第５図　遺構配置図（1/100）…… 13
第６図　遺物平面分布図（1/100）…… 14
第７図　弥生時代の土器（1/3）…… 15
第８図　平安時代の土師器（1/3）…… 17
第９図　平安時代の須恵器（1/3）…… 18
第10図　焼塩壺（1/2）…… 18
第12図　中尾山・馬渡遺跡出土土器…… 19
第13図　下り山７号窯出土須恵器…… 19

表目次

第１表　土器観察表…… 16
第２表　都城市内焼塩壺出土遺跡地名表…… 18

図版目次

図版１　(1) 母智丘原第１遺跡遠景…… 21
(2) 遺跡発見時の現場状況
(3) 発掘調査風景
(4) 母智丘原第１遺跡標準土層
(5) 調査区内扁平礫下部土層断面
図版２　(1) 調査区西側遺物出土状況…… 22
(2) 調査区東側遺物出土状況
(3) 土壙検出状況
(4) 土壙完掘状況
(5) 弥生時代の土器出土状況
(6) 土師器出土状況
図版３　(1) 弥生時代の土器…… 23
(2) 土師器坏口縁部破片
(3) 土師器高台付椀
(4) 土師器口縁内面付着の黒色物質
(5) 土師器坏底面（ヘラ切り痕）
(6) 土師器坏底面（ヘラ切りのちナデ）
図版４　(1) 土師器鉢…… 24
(2) 須恵器坏
(3) 須恵器甕
(4) 焼塩壷
(5) チャート片

Ⅰ　はじめに

1．調査に至る経緯

昭和63年１月、都城市都市緑地公園課は、市内横市町所在の母智丘・関之尾公園の山頂（母智丘神社社殿の東側）に都市公園整備事業の一環として展望台の新設を行っていた。１月８日、その基礎工事によって、土器が出土しているとの連絡が神社周辺の地区住民から都城市教育委員会にもたらされた。市教育委員会社会教育課ではただちに現地に赴き、その時点で、すでに建物基礎の床掘りがほぼ終了しており、基礎壙の断面に土器が露出している状況が確認された。それによって、市教育委員会は市都市緑地公園課に工事の一時中断を要請するとともに両者で協議を行った結果、地下遺構・遺物に影響の恐れのある展望台設置範囲については発掘調査により記録保存の措置をとることとした。調査は、当該範囲約80㎡を対象とし、同年１月18日から29日まで実施した。

2．調査の組織

調査主体者	都城市教育委員会	
	教育長	久味木福市
	社会教育課長	池田正敏
	社会教育課長補佐兼文化係長	藤崎儀彰
庶務担当	社会教育課庶務係長	宮丸　実
調査担当	社会教育課文化係主事補	桒畑光博

発掘作業員　楠見信利・細山田登・下田代清海・中村ミヤ子

3．遺跡の立地と環境

都城盆地西部の霧島山系から連なる母智丘・関之尾の丘陵地一帯は、昭和33年、県立の自然公園に指定されており、母智丘の桜、大淀川水系の庄内川にかかる関之尾の滝、そして、その滝の上流の河床に形成された甌穴群で著名である。

母智丘原第１遺跡は、母智丘の丘頂部に位置する。（第１図）標高は246m程度で、頂上からは都城盆地を一望にできる。本遺跡は明治23年頃、神社社殿の創建の際に古陶器が発見されたという記事が明治35年８月19日の宮崎新報に掲載されており、古くより遺物の出土は知られていたようである。

周辺の遺跡に目を転じてみると、本遺跡から西方約１kmの所に位置する丸山遺跡は、昭和49年、約90㌶に亙るゴルフ場建設にともなって、縄文時代早期の遺構・遺物が発掘されている。[註1]その後の分布調査等により、丸山の丘陵一帯が当該期の遺跡であることが判明している。都城盆地において、数少ない縄文時代遺跡調査例の一つである。母智丘の丘陵から東南部にのびる小台地は『庄内地理志』によれば中世の城郭跡で、新宮城と呼ばれている。そこから小谷を挟んで東にひろがる牧の原・月野原の台地上は昭和63年度の遺跡詳細分布調査によって、縄文時代から中世にかけての遺物が、広範囲にわたって採集されている。

横市川を挟んで、南側の台地縁辺部には弥生時代終末期の集落跡の調査された鍛冶屋遺跡がある。[註2]この遺跡の近辺では平安時代の須恵器蔵骨器が２点発見されているが、[註3]そのうちの一点は、底面に同心円タタキを持つもので、熊本県荒尾古窯跡群や鹿児島県中岳山麓古窯跡群出土資料との類似性が指摘されている。[註4]また、鍛冶屋遺跡の西側、北東方向へ突出する舌状台地は、昭和61年、運動公園造成にともなって発掘調査された中尾山・馬渡遺跡で、縄文時代晩期の土壙群、弥生～古墳時代の遺物、平安時代の掘立柱建物とそれに伴って土師器、須恵器、越州窯系青磁が出土している。[註5]

鍛冶屋遺跡と中尾山・馬渡遺跡の平安時代の遺物は、本書で報告する母智丘原第１遺跡とは時代的に関連があり、これらは当該期の都城盆地の動静を把握する上で重要な資料である。

註

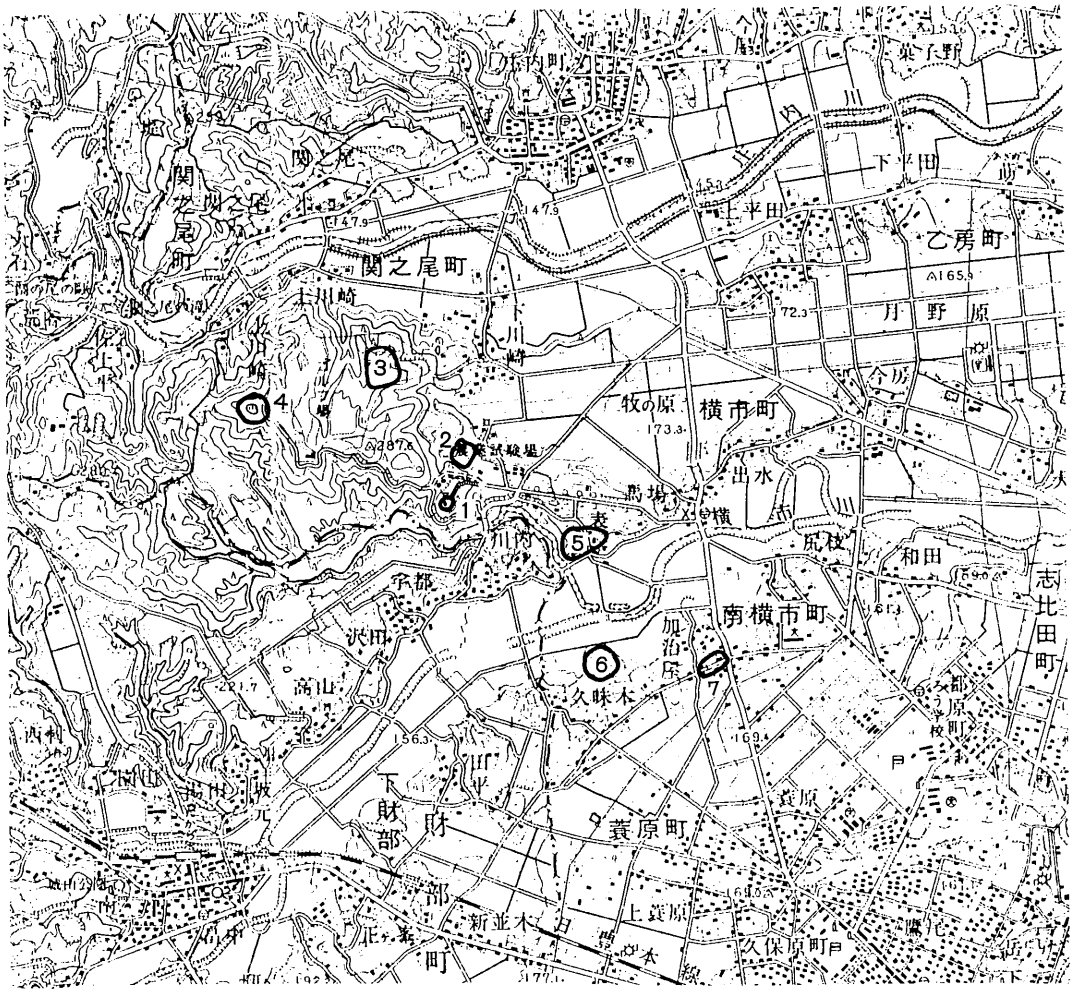
註1．岩永哲夫『丸山遺跡』（宮崎県文化財調査報告書第31集）宮崎県教育委員会　1988

註2．昭和63年１月に発掘調査を行っている。未報告

註3．矢部喜多夫『都城市遺跡註細分布調査報告書（市内中央部）』（都城市文化財調査報告書第５集）都城市教育委員会　1987

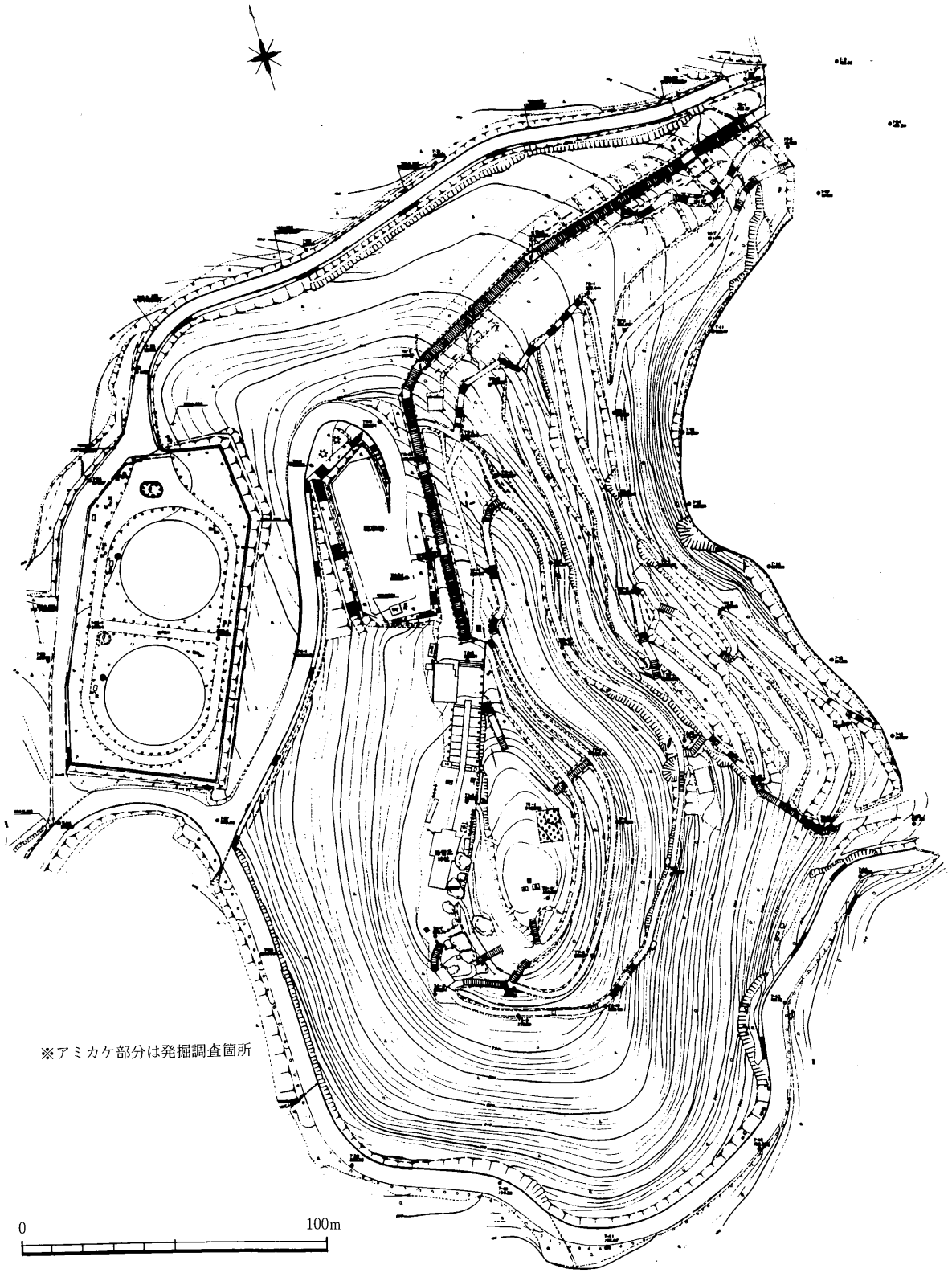
註4．鹿児島大学教授上村俊雄氏の御教示による。

註5．註３に同じ



第１図　母智丘原第１遺跡と周辺の遺跡（1/50,000）

1．母智丘原第１遺跡
2．母智丘原第２遺跡
3．丸山第１遺跡
4．丸山第２遺跡
5．畑田遺跡（新宮城跡）
6．中尾山・馬渡遺跡
7．鍛冶屋遺跡



第2図　遺跡周辺地形図（1/2,000）

Ⅱ　発掘調査報告

1．調査の方法と概要

本調査箇所は母智丘神社社殿東側、丘頂部斜面の約80㎡である。（第２図）

前章で述べたように、展望台基礎の床掘りはほぼ完了しており、そのほとんどが、霧島火山系噴出源の御池ボラ層まで達していた。そのため、土層観察用の畦を床掘りの断面を利用し、調査範囲内に十文字に残した。

調査はまず、基礎壙の断面を観察し、公園整備の張芝の際の盛り土である１層を取り除き、その後、順々に、鍵となる２枚の軽石層（白ボラと御池ボラ）を基準に掘り進めていった。当初、調査区北側には旧展望台の基礎が残っており、あわせて、近現代のごみ穴が掘られていることを聞き、包含層のかなりの破壊が懸念されたが、白ボラと御池ボラに挟まれた間層から弥生時代と平安時代の土器片が合計136点出土している。なお、遺構は、御池ボラ層直上で確認し、ピット１基と土壙１基を検出している。

また、調査範囲の南側に散在する1～2ｍ程度の板状の礫群については、ミニトレンチを設け、断面観察を行った結果、１層の上部に食い込んでおり、公園整備の際、移動させられたものであることが判明した。

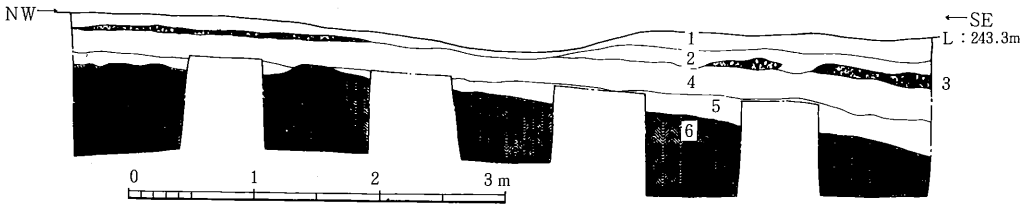
2．層序

都城盆地内の遺跡層序については、近年、各所で発掘調査が行われ、データの集積が成されている。特に、シラスより上位の堆積物については、新期火山噴出物を基準として基本的な層序が明らかとなっている。[註1] それによると、アカホヤ火山灰上位には２枚の特徴的な軽石層が存在する。上層のいわゆる「白ボラ」と呼ばれている軽石層は文明年間（1469～1487年）に噴出した桜島起源のものとされ、盆地の中・南部においては層厚５㎝程度に薄く、あるいは、ブロック状に堆積しており、鎌倉～室町時代の溝などの遺構内には比較的厚く堆積している。下層の黄燈色を呈する風化の進んだ軽石層は霧島火山系の御池降下軽石である。噴出年代は縄文時代後期ごろと推定されている。上記の２枚の軽石層の間には腐植土層の発達がみられ、遺跡によって、２～３層に分層できる。

次に、本遺跡の土層を上位から説明する。（第３図）

１層は暗褐色～オリーブ黒シルト質で細粒の白色軽石を含み、硬くしまっている。表面には芝生が張られている。２層は黒褐色砂質シルト層で細粒の灰白色軽石を含む。公園整備の際の

削平が著しく、部分的に残存する。３層は層厚５～８㎝程度のブロック状に堆積する１㎜以内の灰白色軽石層で前述の「白ボラ」である。４層は黒褐色の粘質シルト層で５㎜以内の黄橙色の軽石を含む。遺物の包含はこの層に顕著で、特に下部において、平安時代の遺物が比較的安定した出土状況を示す。５層はオリーブ黒の砂質シルト層で、５㎜以内の黄橙色の軽石を多く含む。この層の上面において、弥生土器の出土がみられた。中尾山・馬渡遺跡ではこの層に該当する層から、縄文時代晩期の遺物が出土している。６層は２㎝以内の軽石粒からなる御池降下軽石層である。以下、部分的に深掘りを試みたが、褐色の濁った粘質土層が数十㎝続き、遺物の包含はみられなかった。



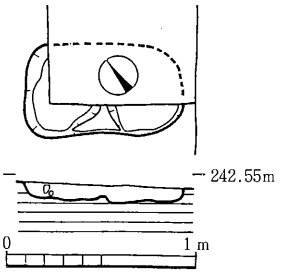
第３図　土層断面図（1/60）

３．遺構

６層（御池ボラ層）直上で検出された遺構は、ピット１基と土壙１基である。（第５図）

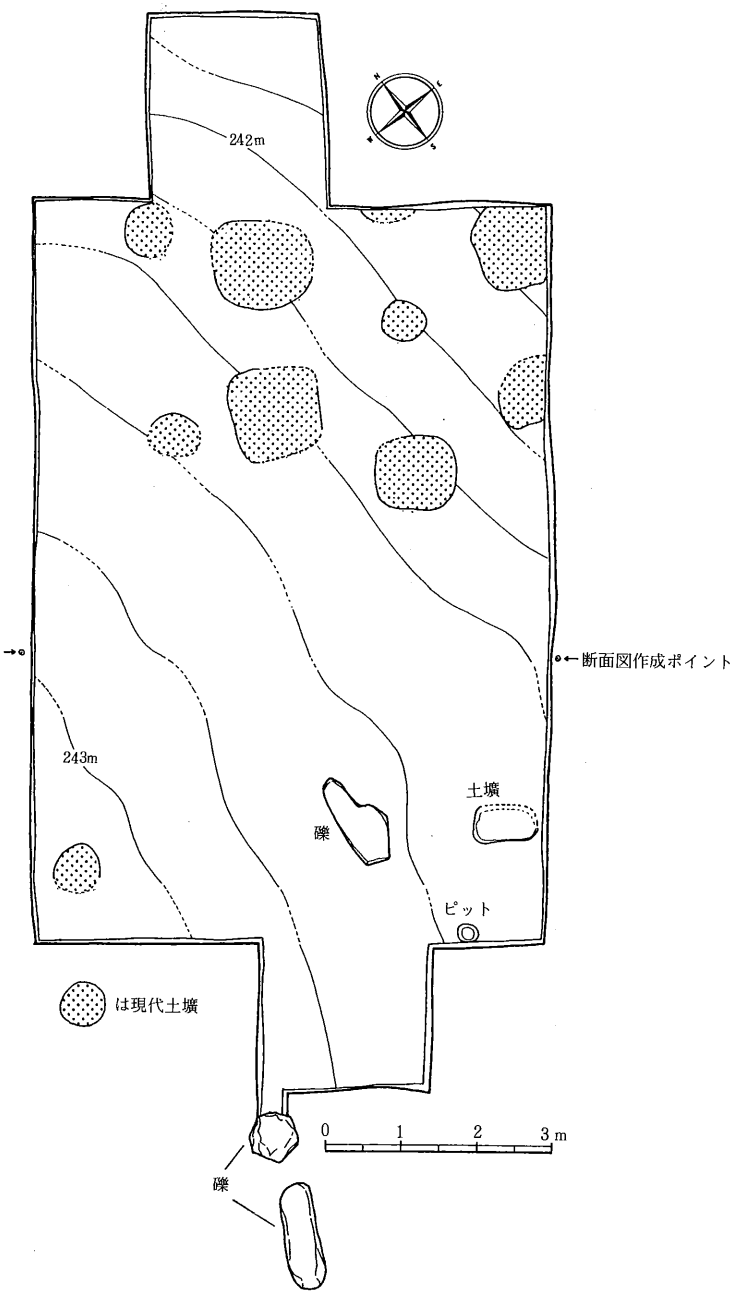
ピットは径25㎝の円形、検出面からの深さ35㎝で、埋土は黒褐色の粘質シルト層（４層）である。（第５図）

土壙は、東側約半分を展望台基礎壙によって、破壊されていたが、略楕円形を呈していたものと推定される。長径104㎝、短径48㎝を計り、床面はほぼ水平で、中央部の短軸方向に４㎝程度の帯状の高まりがみられる。埋土は４層を基本とした、黒褐色微砂質シルトで、黄橙色軽石やオリーブ黒砂質シルトのブロックを含む。（第４図）

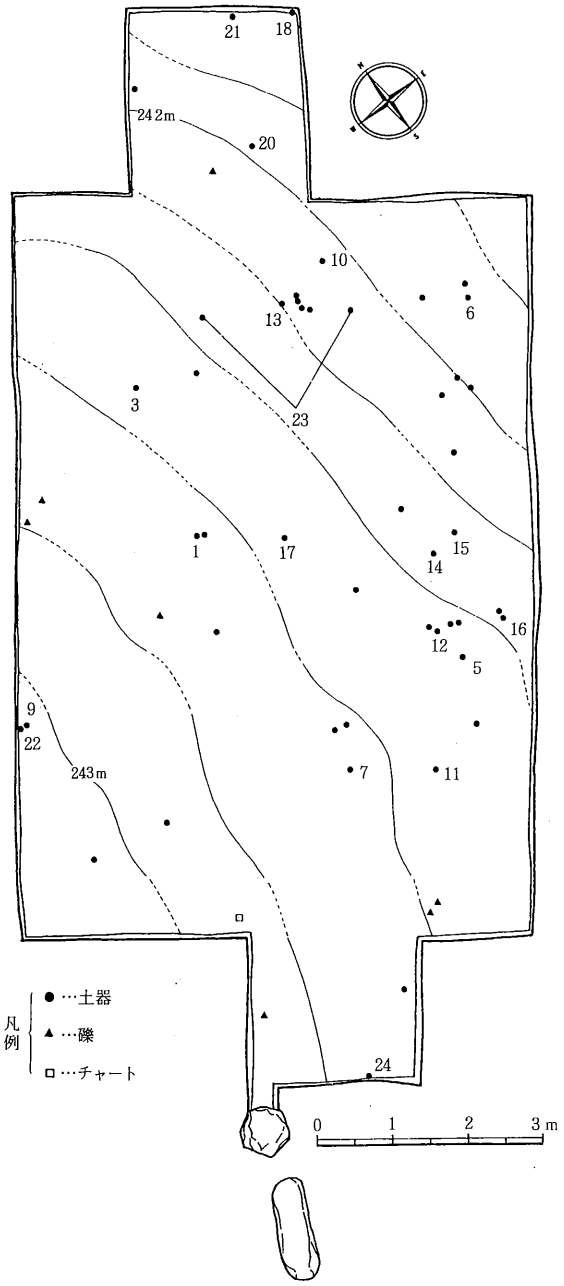


第４図　土壙実測図（1/40）

これらの遺構からは遺物の出土は見られず、時期は詳らかにしえない。



第5図　遺構配置図（1/100）



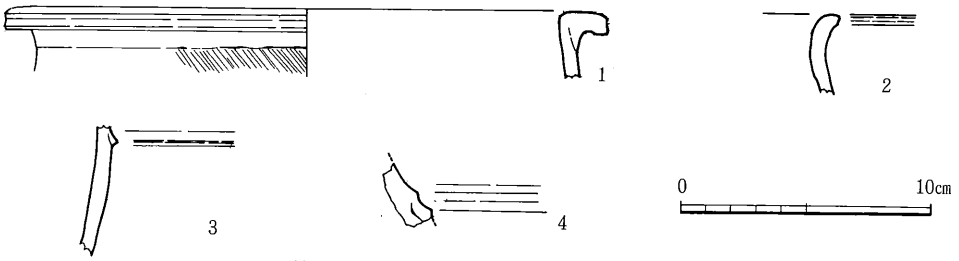
第6図　遺物平面分布図（1/100）

5．遺物

出土した遺物の大半が土器であるが、その他に自然礫と石器としての加工は認められないものの、チャートの石材が1片出土している。出土層位は層序の項目でも述べたように、4層下部から5層上面を中心とするが、現代土壙の埋土中及び、1層からも摩滅した土器片の出土がみられた。出土状況の平面分布は第6図に示した。以下、図化できた資料のみ、種類ごとに説明を加える。なお、詳細については土器観察表（第1表）を参照されたい。

①弥生時代の土器（第7図）

合計6点出土しているが、図化できたのは4点である。**1**と**3**は甕形土器である。**1**は口縁部が、逆L字に屈曲し、口縁部上面は平坦である。口唇部はくぼむ。口縁部外面は接合の際の痕跡が沈線状に残り、ナナメ方向のハケメを観察することができる。**2**は小型の壺形土器であろうか。口唇部に浅いくぼみをもつ。**4**は壺形土器の肩部の破片で、シャープな三角凸帯をもつ。内面は剝落している。**1**と**3**の甕形土器のみ、胎土中に金ウンモが観察される。



第7図　弥生時代の土器（1/3）

②土師器（第8図）

土師器はほとんどが小破片で、総数約130点の出土をみている。

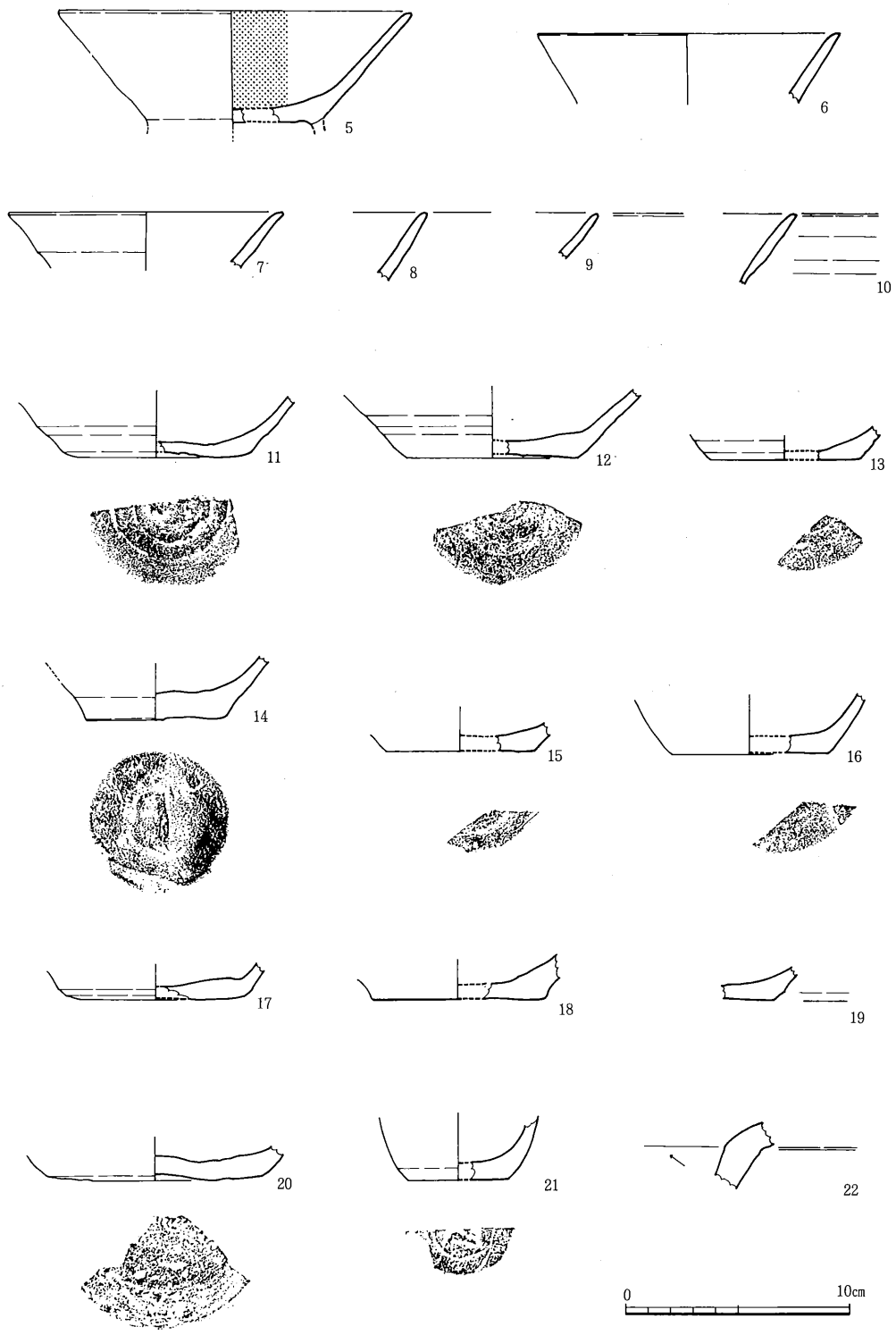
5は復元口径15.7cmを計る黒色土器Aである。体部は外傾しながら直線的にのび、底部には貼りつけの高台をもつものであるが、本資料は接合部で剝落している。**11～20**までは坏の底部でいずれも底部切り離しは回転ヘラ切りであるが、切り離し後、ヘラ切り痕をナデ消すもの（**16～19**）がある。**14**は他と比べてやや肉厚な底部である。本遺跡出土の土師器の坏・椀は外面のロクロ調整痕による稜線は概して不明瞭である。なお、**7**,**12**, **20**, の内面には黒色物質（カーボン？）の付着が認められた。

21は体部が丸く立ち上がる。器種は不明。

22は上記の土器群に比べ、粗い砂粒を含む。器形は鉢形と推定され、胴部内面はナナメ方向のヘラ削り、口縁部は内外面ともにヨコナデを行う。

第１表　土器観察表

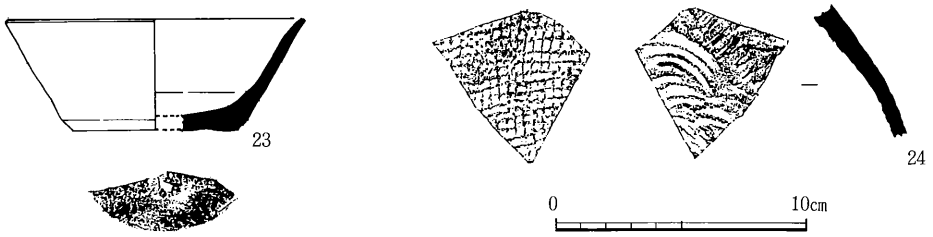
No.	器　種	出土層	法　量	色　調	胎　土	調　整	備　考
1	甕	4下	24cm	㊥暗褐色 ㊦にぶい橙色	金ウンモ・セキエイ 軽石	㊥ハケメ6本/cm ㊦ナデ	外面にスス付着
2	小型壺？	5上		㊥橙色 ㊦灰色	チョウ石・セキエイ 軽石	㊥ヨコ方向のミガキ ㊦ナデ	
3	甕	4下		㊥褐色 ㊦暗褐色	金ウンモ・セキエイ	㊥ナナメ方向のナデ ㊦ナデ	外面にスス付着
4	壺	5上		㊥にぶい黄橙色 ㊦にぶい黄橙色	セキエイ	㊥ナデ ㊦不明	
5	椀	4下	15.7cm	㊥浅黄色 ㊦黒色	微砂粒 （1㎜以内）	㊥ロクロナデ ㊦ミガキ	黒色土器A 貼付高台
6	？	4	13.6cm	㊥橙色 ㊦橙色	微砂粒	㊥ロクロナデ ㊦ロクロナデ	
7	坏	4	12.2cm	㊥浅黄色 ㊦浅黄色	微砂粒	㊥ロクロナデ ㊦ロクロナデ	内面カーボン付着
8	？	4下		㊥にぶい黄橙色 ㊦にぶい黄橙色	微砂粒	㊥ロクロナデ ㊦ロクロナデ	
9	？	4		㊥橙色 ㊦橙色	砂粒（1㎜以上）	㊥ロクロナデ ㊦ロクロナデ	
10	？	4		㊥淡橙色 ㊦淡橙色	砂粒	㊥ロクロナデ ㊦ロクロナデ	
11	坏	4下		㊥にぶい黄橙色 ㊦にぶい黄橙色	微砂粒	㊥ロクロナデ ㊦ロクロナデ	ヘラ切り
12	坏	4下		㊥橙色 ㊦橙色	微砂粒	㊥ロクロナデ ㊦ロクロナデ	内面カーボン付着 ヘラ切り
13	坏	4		㊥浅黄色 ㊦浅黄色	微砂粒	㊥ロクロナデ ㊦ロクロナデ	ヘラ切り
14	坏	4下		㊥にぶい黄橙色 ㊦にぶい黄橙色	微砂粒	㊥ロクロナデ ㊦ロクロナデ	ヘラ切り
15	坏	4下		㊥浅黄色 ㊦浅黄色	微砂粒	㊥ロクロナデ ㊦ロクロナデ	ヘラ切り
16	坏	4下		㊥灰白色 ㊦灰オリーブ色	微砂粒	㊥ロクロナデ ㊦ロクロナデ	ヘラ切りのちナデ
17	坏	4		㊥明赤褐色 ㊦明赤褐色	砂粒	㊥ロクロナデ ㊦ロクロナデ	ヘラ切りのちナデ
18	坏	4下		㊥にぶい黄橙色 ㊦にぶい橙色	微砂粒	㊥ロクロナデ ㊦ロクロナデ	ヘラ切りのちナデ
19	坏	現代土坑		㊥浅黄色 ㊦浅黄色	微砂粒	㊥ロクロナデ ㊦ロクロナデ	ヘラ切りのちナデ
20	坏	4		㊥灰白色 ㊦灰白色	砂粒	㊥ロクロナデ ㊦ロクロナデ	内面カーボン付着 ヘラ切り
21	？	4下		㊥灰色 ㊦黄灰色	微砂粒	㊥ロクロナデ ㊦ロクロナデ	ヘラ切り
22	鉢	4下		㊥にぶい橙色 ㊦にぶい褐色	砂粒	㊥ナデ ㊦ヘラケズリ	
23	坏	4	12cm	㊥灰オリーブ色 ㊦にぶい黄橙色	微砂粒	㊥ロクロナデ ㊦ロクロナデ	ヘラ切りのちナデ
24	甕	4下		㊥緑灰色 ㊦緑灰色	微砂粒	㊥格子目タタキ ㊦同心円タタキ	
25	焼塩壺	4		㊥橙色 ㊦橙色	砂粒	㊥ナデ ㊦布痕	



第８図　平安時代の土師器（1/3）

③**須恵器**（第９図）

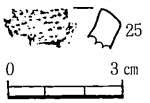
出土したのは図示した２点のみである。**23**は灰オリーブ色を呈する坏で、復元口径12cmを計る。体部は外傾しながら直線的にのび、口縁部でわずかに外反する。**24**は甕の胴部片と判断した。色調は**23**に比べ青味が強く、外面は格子目タタキ、内面には同心円タタキが見られる。



第９図　平安時代の須恵器（1/3）

④**焼塩壺**（第10図）

図示した１点のみの出土である。（**25**）全体的に摩滅が著しい。内面の布痕は、１cm単位に６本程度の布目である。



第10図　焼塩壺（1/2）

第２表　都城市内焼塩壺出土遺跡地名表

	遺跡名	所在地	分類	市内遺跡番号	備考
1	小岡原（こおかばる）第１遺跡	下水流町　字小岡原	？	10031	採集
2	稲荷田（いなりだ）遺跡	丸谷町字山ノ田、稲荷田	森田Ⅱ-a類？	10057	採集
3	母智丘原（もちおばる）第１遺跡	横市町字母智丘原	森田Ⅱ-a類？	6029	本報告
4	中尾山（なかおやま）・馬渡（まわたり）遺跡	南横市町字中尾、馬渡、	森田Ⅱ-a類	6009	昭和61年調査
5	都之城本丸（みやこのじょうほんまる）跡	都島町字本城	中世	5027	昭和63年調査
6	笹ケ崎（ささがさき）遺跡	梅北町字笹ケ崎	森田Ⅱ-a類	7004	採集
7	中床丸（なかとこまる）遺跡	梅北町字中床丸	森田Ⅱ-a類？	7030	採集
8	楠畑（くすはた）遺跡	梅北町字神応寺、楠畑	森田Ⅱ-a類	7049	採集
9	中尾（なかお）第１遺跡	安久町字中尾、池ノ友	森田Ⅱ-a類？	7066	採集
10	下尾平野（しもおびらの）第３遺跡	安久町字下尾平野	森田Ⅱ-a類	7084	採集

※焼塩壺の分類は森田（註２）によった。

註

註1．成尾英仁「都城盆地の火山噴出物」『都城市遺跡詳細分布調査報告書（市内中央部）』（都城市文化財調査報告書第５集）都城市教育委員会　1987

註2．森田勉「焼塩壺考」『太宰府古文化論叢下巻』1983

Ⅲ　まとめ

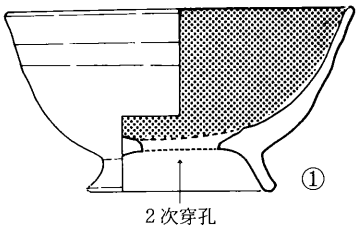
母智丘原第１遺跡の調査は、面積約80㎡という小規模のものではあったが、周辺の中尾山・馬渡遺跡や鍛冶屋遺跡などとともに、平安期の都城盆地の動静を知る上で貴重な資料を提供したといえる。また、弥生時代中期に位置づけられる土器の出土は、当該期の遺跡の立地などについて、今後の検討材料となるであろう。

ここでは平安時代の遺物に関するいくつかの問題点に触れ、まとめにかえたい。

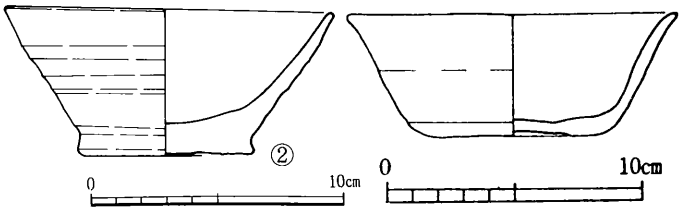
１．土師器について

本遺跡出土土師器はほとんどが小破片であり、法量等も不明なものが多かったが、**５**の黒色土器Aのみが、高台を欠くものの、全形を知り得る唯一の資料であった。この土器の器形の特徴は、体部が直線的に外傾するところである。これに対し、本遺跡とは横市川を挟んで対峙する台地の縁辺部に位置する中尾山・馬渡遺跡では、体部が丸く立ち上がり、高い高台をもつ黒色土器A（第12図①）が出土している。形態の相違は、坏の底部にもみられ、中尾山・馬渡遺跡では本遺跡ではみることのできない張り出し状底部を持つ資料（第12図②）が存在する。[註1] このような近接する遺跡間の資料の相違は当然、時期差と捉えられるが、以下、それらの先後関係と年代について、他遺跡出土資料と比較して考えてみる。

高台付椀の形態変遷は北部九州の成果によると、須恵器椀と同様なストレートな体部をもつものから体部に丸みをもつものへと変化していくことが判明している。年代については、大宰府において、前者が９世紀前半、後者が９世紀後半に位置付けられており、[註2] 豊前地方においては前者に９世紀後半、後者に10世紀代という年代が与えられている。[註3] さて、中尾山・馬渡遺跡の張り出し状の底部をもつ坏と同様の形態を呈する坏は、宮崎学園都市遺跡群内の小山尻東遺跡のＳＡ１で10世紀中頃の越州窯系青磁碗と共伴しており、[註4] おおよそ10世紀後半という年代が導き出せる。したがって、中尾山・馬渡遺跡出土土器に先行する本遺跡の黒色土器Aは、９世紀代の須恵器の高台付椀に共通するその形態を考慮すると、９世紀後半～10世紀前半に位置付けられよう。



第12図　中尾山・馬渡遺跡出土土器



第13図　下り山７号窯出土須恵器

2．須恵器について

本遺跡からは甕と坏がそれぞれ１点ずつの出土であった。宮崎県内における平安時代の須恵器については延岡市苅田窯跡の調査[註5]があるものの、全般的に窯業生産遺跡の調査は遅れており、もっぱら、他地域の資料との比較により、時期を決定するという方法がとられている。県内における当該期の須恵器消費遺跡としては宮崎学園都市遺跡群や宮崎市内野々第Ⅱ遺跡[註6]などがある。後者の遺跡においては、高台付椀と坏等の供膳用土器に須恵器と土師器の両者があり、その比率は土師器：須恵器＝５：１と、他遺跡に比べ、須恵器の占める割合が多い。内野々第Ⅱ遺跡出土資料と本遺跡の坏とを比べてみると、両者は調整、形態等が明確に異なっている。そこで、後者の類例を県外に求めてみると、熊本県球磨郡錦町所在の下り山７号窯出土資料[註7]の中に、体部が直線的にのび、口縁部が外反気味で、法量も本遺跡のものに酷似している坏（第13図）があり、９世紀後半という年代が与えられている。

3．焼塩壺について

本遺跡においては、わずか１点のみの出土であったが、この土器は報告書によっては内面に布目の圧痕をもつという特徴から、「布痕土器」と呼ばれ、近年、宮崎県内においても出土例が増加している。その機能については固型塩の運搬に使用されたものとされている。

都城市内においては、昭和61年から行っている市内遺跡詳細分布調査などによって、現在までに10か所の出土地が明らかになっている。内、都之城本丸跡出土の中～近世の蓋付の形態のものを除いて、他は全て、尖底の椀形を呈するものと考えられ、森田勉氏の分類によるⅡa類に該当する。[註8]中尾山・馬渡遺跡においてまとまって出土した以外は、ほとんどが表採資料ということもあり、詳細については不明であるが、市内南部の梅北町における出土は、この地域が平安時代の寺院跡や経塚が集中するところであり、いわゆる島津荘の展開の中心地と推定される場所として、特定の階層による固型塩の消費が考えられよう。

註

註1．昭和61年調査。未報告　実測図については調査者の矢部喜多夫氏の許可をえ、完形品を抽出して掲載した。

註2．横田賢次郎・森田勉「大宰府出土の土師器に関する覚書き」「九州歴史資料館研究論集」2　1976

註3．谷口俊治「北部九州における平安時代の土器について」『中近世土器の研究』1985

註4．長津宗重『小山尻東遺跡』（宮崎学園都市遺跡発掘調査報告書第３集）宮崎県教育委員会　1985

註5．小田富士夫『苅田窯跡』（宮崎県文化財報告書第24集）宮崎県教育委員会1983

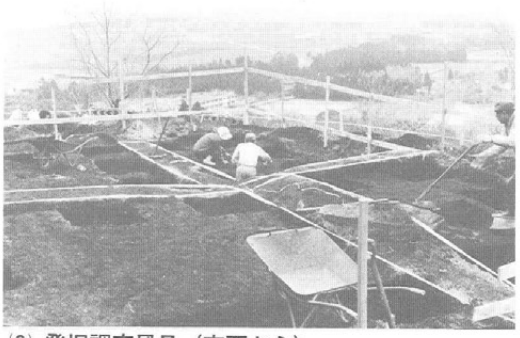
註6．野間重孝『内野々第Ⅱ遺跡』宮崎県住宅供給公社・宮崎市教育委員会　1982

註7．横尾泰宏・松本健郎・勢田広行『生産遺跡基本調査報告書』Ⅱ（熊本県文化財調査報告書第48集）熊本県教育委員会　1980

註8．Ⅱの註２

(1) 母智丘原第 1 遺跡遠景（矢印の部分）

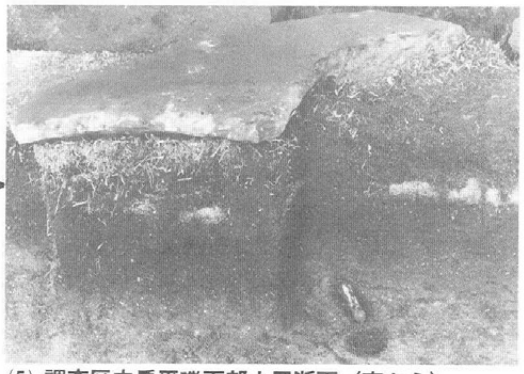
(2) 遺跡発見時の現場状況



(3) 発掘調査風景（南西から）

1 層
2 層
3 層（白ボラ）
4 層
5 層
6 層（御池ボラ）

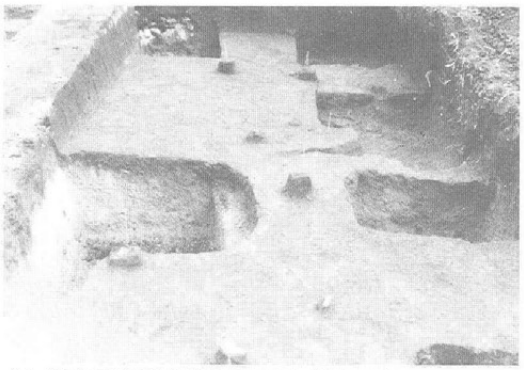
(4) 母智丘原第 1 遺跡標準土層



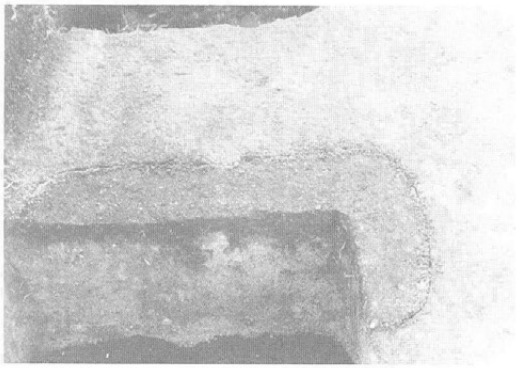
(5) 調査区内扁平礫下部土層断面（東から）

図版 2

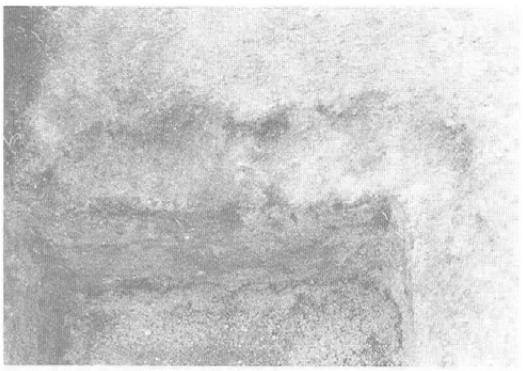
(1) 調査区西側遺物出土状況（南から）



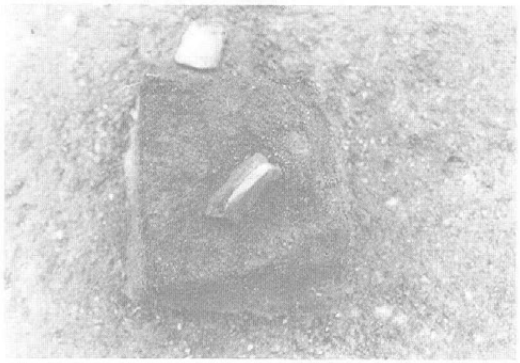
(2) 調査区東側遺物出土状況（南から）



(3) 土壙検出状況（北から）



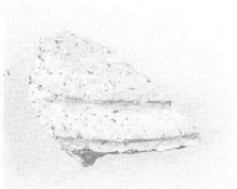
(4) 土壙完掘状況（北から）



(5) 弥生時代の土器出土状況

(6) 土師器出土状況

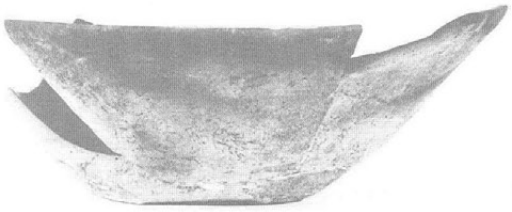
甕



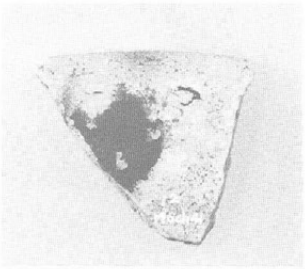
壺

(1) 弥生時代の土器

(2) 土師器坏口縁部破片

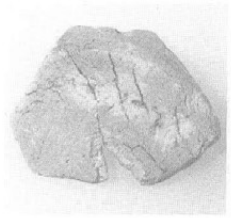


(3) 土師器高台付椀



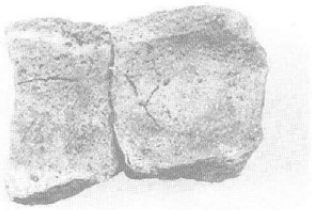
(4) 土師器口縁内面付着の黒色物質

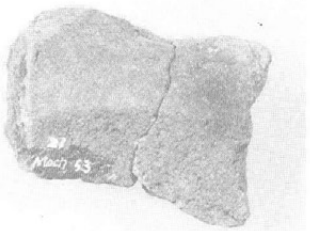
(5) 土師器坏底面（ヘラ切り痕）



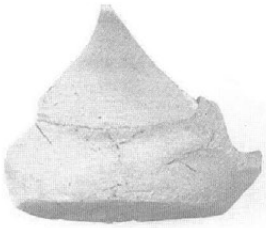
(6) 土師器坏底面（ヘラ切りのちナデ）

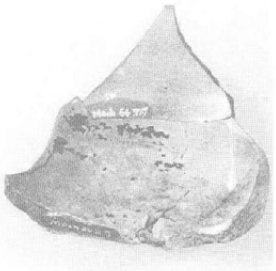
図版 4



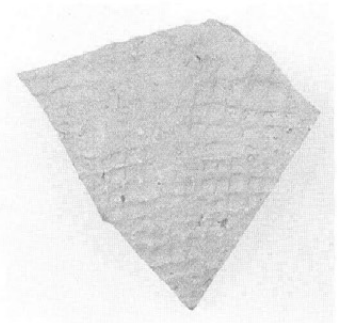


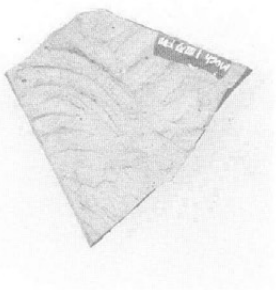
(1) 土師器鉢



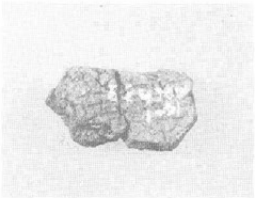


(2) 須恵器坏





(3) 須恵器甕



(4) 焼塩壺

(5) チャート片

県指定 志和池（しわち）１号墳

例　　言

1．本報告は県指定志和池１号墳隣地開発に対する試掘確認調査報告である。

2．試掘確認調査は昭和63年５月31日から６月４日まで実施した。

3．本調査の調査主体は都城市教育委員会で担当は矢部があたり、本報告の執筆・編集もおこなった。

県指定志和池１号墳の周溝確認調査

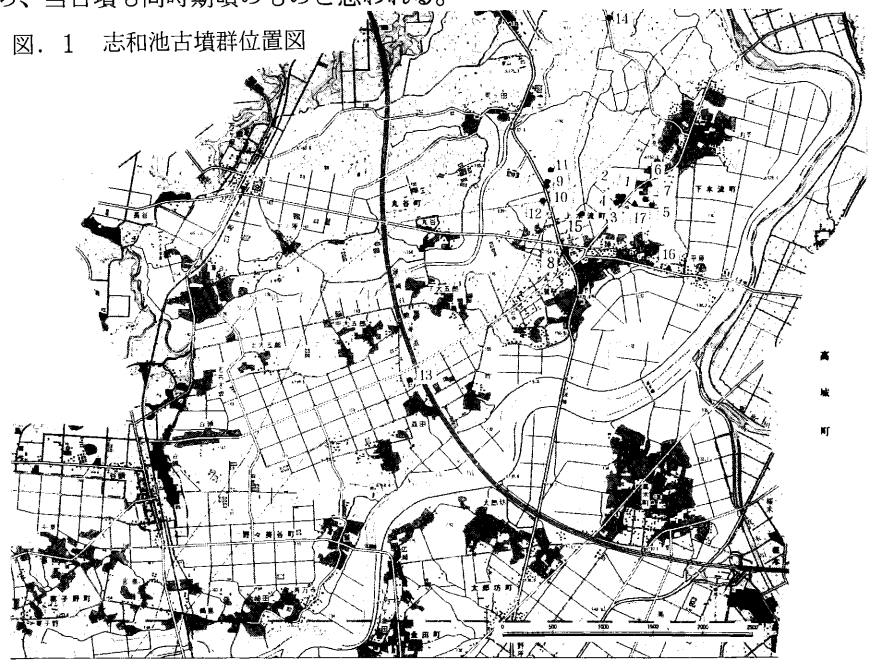
調査に至る経緯

昭和63年４月14月、開発行為者㈲山崎木材店より県指定志和池１号墳の隣接地（周知の埋蔵文化財包蔵地）の開発に伴い、文化財保護法第57条の２に基き埋蔵文化財発掘届の提出があった。市教育委員会は昭和63年５月27日試掘確認調査を行うため文化財保護法第98条の２第１項に基き埋蔵文化財発掘通知を文化庁へ提出した。試掘調査は昭和63年５月31日より６月４日まで実施した。

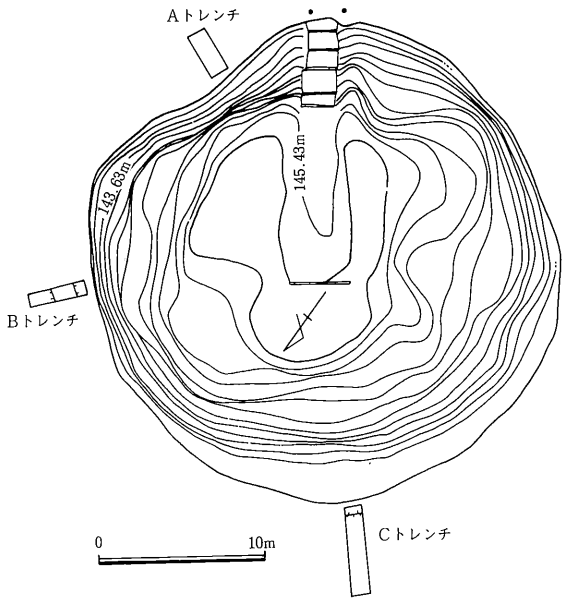
調査の概要

試掘調査は県指定志和池１号墳の隣接地３ケ所に図２のとおり試掘トレンチを設けた。トレンチは東側から左回りにA、B、Cトレンチと呼称し、トレンチの規模は1×2ｍから1×5ｍ程である。当畑地は既に1～0.5ｍ程盛土がなされており、基本土層層序は第Ⅰ層耕作土、第Ⅱ層黒褐色土、第Ⅲ層明黒褐色土、第Ⅳ層御池ボラと続き、第Ｏ層に盛土がくる。Ａ・Ｂ・Ｃ各々トレンチを御池ボラ層上面まで掘り下げて遺構の確認を行った。結果Ｂ・Ｃトレンチで周溝と思われる落込みを確認し、Ａトレンチでは確認することができなかった。Ｂ・Ｃトレンチの落込みは二重に存在するようである。しかし、県指定域内の調査を行なえないことや盛土が厚いことなどから詳細について不明である。（図４を参照）。この県指定志和池１号墳は前方部が既に消失(破壊)しており、Ａトレンチで周溝が確認されないことから、南側に前方部が存在していた可能性が高い。また、Ｂトレンチより６世紀代後半の須恵器の坏身（図６）が出土していることから、当古墳も同時期頃のものと思われる。

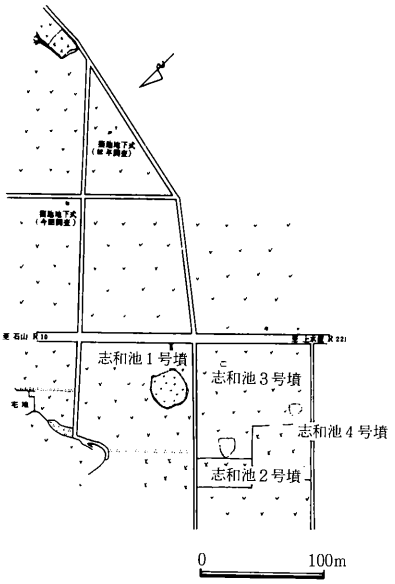
図．１　志和池古墳群位置図



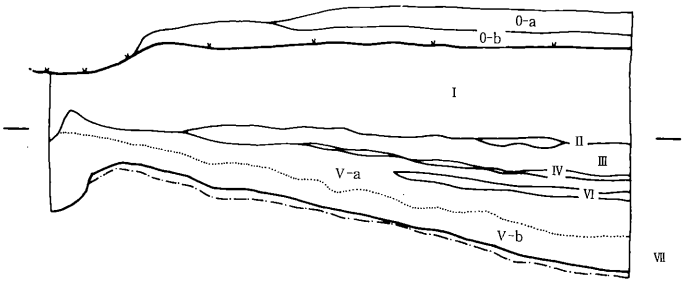
※１～15は志和池古墳の号数に一致する。16は平原地下式横穴墓群。17は築池地下式横穴墓群。



図．2　志和池１号墳平面図及び試掘トレンチ配置図

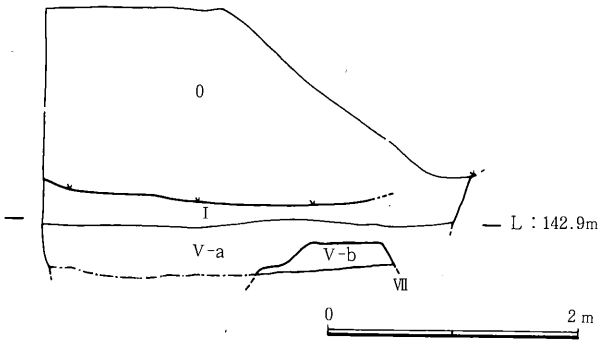


図．3　志和池１号墳周辺地形図

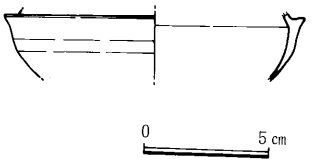


第０層―盛土〈a 層―土砂 / b 層―栗石〉
第Ⅰ層―耕作土
第Ⅱ層―白ボラ（混土）
第Ⅲ層―黒褐色弱粘質シルト
第Ⅳ層―白ボラ(混土)
第Ⅴ層―漆黒粘質シルト〈a 層―微量の御池ボラを含む / b 層―多量　〃〉
第Ⅵ層―灰黒褐色硬質シルト
第Ⅶ層―御池ボラ

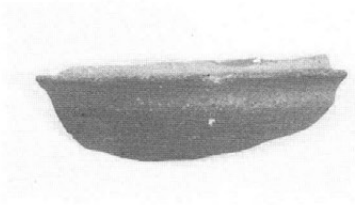
図．4　Ｃトレンチ南壁土層断面図



図．5　Ｂトレンチ東壁土層断面図



図．6　Ｂトレンチ出土須恵器坏身



◀Bトレンチ出土須恵器

▶志和池1号墳近景（東から）

▲志和池１号墳遠景（北から）

都城市文化財調査報告書第９集

母智丘原第１遺跡
県指定 志和池１号墳

発行年月　平成元年３月
発　　行　都城市教育委員会
印　　刷　㈲　文　昌　堂